

塞下の曲

常

建

北海の陰風地を動かして来る

明君祠上竜堆を望む

體尽く是れ長城の卒

日暮沙場飛んで灰と作る

【作者】常建(生没年不詳)唐の詩人。長安の人と伝えられるが、詳細不明。開元年間二十九年のうち、開元十五年(七二七)は中間の年に当たり

ますが、この年に王昌齡、常建という二人の詩人が進士に及第している。盱眙(くい、安徽省)の尉となつたが、昇進が遅いのに不満を持ち、
隠者の生活に憧れて、名山を歩き回つた。あるとき山中で仙人のような女に会い、術を授かつたと言われ、晩年は鄂渚(がくしよ、湖北省武
漢市の西)に隠棲し、王昌齡らを招いて、自由な生活を送つた。

【備考】常建も若いころは王昌齡と同じように辺塞詩を作り、宴会の席などで披露していた。詩題の「塞下」(さいか)は砦の下。起句の「北海の陰風」
は北の砂漠から吹く陰鬱な風とも解せませんが、承句に「龍堆」(白龍堆)とあり、ロブノール(新疆ウイグル自治区東部にある湖)の東に広がる
砂漠を差します。したがつて、ロブノールの湖上を渡つて吹いて来る北風と解することができます。「明君」は漢の元帝時代に匈奴の単于に嫁
がせられた王昭君のことですが、その祠と称する地は数か所にあり、唐代は漠然としていたと思われれます。龍堆を西に望むあたりは漢の長
城の東端でした。そこを捉えて西域守備の陰惨な結末を詠うのです。ただし、常建が西域に従軍したとは考えられませんが、多くの辺塞
詩と同様、想像の詩です。